

## ベースボールにみるグローバル化 (3) — 北米野球のリロケート先としてのオーストラリア —

石 原 豊 一

### 目次

#### はじめに

#### 1：野球のグローバル化研究史

#### 2：オーストラリア野球史

##### 2-1：文化ヘゲモニー下における伝来

##### 2-2：資本と結びついた普及とプロリーグの盛衰

#### 3：ABL の概要

#### 4：「ベースボール・レジーム」上の ABL

##### 4-1：MLB のファームとしての ABL

##### 4-2：冬季リーグとしての ABL

##### 4-3：豪州野球にとっての ABL

#### 5：ABL の可能性

##### 5-1：セミプロ：先進国における新たなプロ野球の形

##### 5-2：「ベースボール・レジーム」の拡大先としての豪州

#### まとめ

### はじめに

グローバル経済の展開の中、「格差」が地球規模で拡大していることが指摘されている。グローバル資本が、安価な資源、労働力を求めて生産の場をリロケーションし、あるいは、富を求めた途上国からの人の移動が、移動先において労働力のダンピングを助長しているグローバル化の現実は、多くの人々が知るところとなっている。

このことは、スポーツの世界にも反映されている。欧州のサッカー、米国の四大メジャー（野

球、アメリカンフットボール、バスケットボール、アイスホッケー)などのプロスポーツは、今や地球規模の娯楽産業と化し、世界中の人々の心をとらえながら巨大ビジネスへと変貌を遂げている。その結果、そこでプレーするトップアスリートの報酬は、天文学的数字に跳ね上がっている。その一方で、プロスポーツ資本は、人材獲得網も地球規模に展開させていくのであるが、この結果が、世界各地で起こっている人材育成の場の拡大としてのプロ化の進展と、それに伴う低報酬のプロアスリートの増加である。つまり、近年のスポーツのプロ化を伴ったグローバルな拡大は、人材育成の場のリロケーションとも考えられる、それ自体ではビジネスになりにくい小規模プロスポーツを発生させ、そこでは安価な労働力と化したアスリートの移動が展開されるのである。このようなプロスポーツの発生は、現在のスポーツのグローバル化の新たな潮流と言える。

2010年11月6日、オーストラリア(以下豪州)にプロ野球リーグ、オーストラリアン・ベースボール・リーグ(ABL)が開幕した。開催期間4カ月、若手選手中心のこのリーグに集う選手のほとんどは、低報酬で野球という労働に従事していた。月額数百ドルから数千ドルという彼らの報酬は、北米トップリーグであるメジャーリーグ(MLB)や日本のプロ野球(NPB)でプレーする選手の報酬にははるか及ばない。

この国には、過去にもプロ野球リーグが存在したが、その後消滅し、以降はアマチュア野球中心の運営が行われていた。かつて豪州にプロ野球が存在していた1990年代は、MLBが市場、選手獲得網を求めて国際戦略を推し進め始めた時期でもある。

野球のグローバル化研究の第一人者であるクラインは、その著書“Growing the Game”において、野球のグローバル化をMLBによるマーケット、選手獲得網拡大であると位置づけ、その拡大の先を、安価な労働力を確保できるアフリカなどの途上国に見出している。そして彼は、すでに他のグローバルスポーツが浸透し、賃金水準の高い欧州などにおいては、野球が根付くことは難しいとしているが(Klein:2006)、現在起こっているのは、先進国にすら低報酬の小規模プロ野球リーグが勃興するという、彼の予想を超えたプロ化を伴った野球の拡大である。

本稿においては、クラインの想定を超えるプロ化を伴った野球のグローバルな拡大を理解する枠組みとして、MLBによる世界戦略の結果、構築された各国リーグによる地球規模のネットワークである「ベースボール・レジーム」(石原:2010a)を提示する。そして、豪州に再開されたプロ野球リーグをそのネットワーク上に位置づけることにより、これを分析する。その上で、この新興プロ野球リーグが再興された背景、また、そのネットワークにおける機能を探ることにより、従来野球の普及度が決して高いとは言えなかった先進国にも、同様の野球リーグが将来的に興っていく可能性があることを提示する。その新興リーグの世界的展開には、このような底辺のプロリーグというべき人材育成の場でプレーする、将来の収益の装置となりうるであろう一部有望選手の「かませ犬」役を演じる大多数の選手の参加が不可欠である。このようなリーグを通じて、資本は、安価な労働力を世界中から集めている反面、選手の側に立て

ば、プレーレベルの下がったプロリーグを、「プロ野球選手」という人生経験の場として、自らのライフプランにうまく組み入れている現実も存在するのである。

このことから、とかく資本による収奪の装置の拡大と捉えられることの多いグローバル化という現象が、それを受容する側のレベルにおいては、それを受け入れる個人々の認知が働くことによっても駆動していることを指摘することができる。

## 1：野球のグローバル化研究史

スポーツのグローバル化については、すでに多くの研究がなされている。そのグローバルな普及については、近代を迎えて以来の、宗主国の文化事象の植民地への浸透という、文化帝国主義（トムリンソン：1997）の分脈から捉えられることが多かったが、グットマンは、これを否定し、弱者である植民地、あるいは従属国の人々による自発的な受容である「文化ヘゲモニー」として捉えた（Guttman：1994）。この下では、政治経済的な意味での弱国の人々は、強国のゲームを受容することにより、スポーツを通じて強国に対抗し、自らのアイデンティティを覚醒させることも可能になる（Klein：1991a, Majumdar & Brown：2007）。

マグワイアは、スポーツのグローバル化の潮流を、戦間期以降の英国ヘゲモニー後退と第二次大戦後の米国ヘゲモニー確立の構図で捉えたが（マグガイヤー：1999）<sup>1)</sup>、この時期以降のスポーツの普及は、それ以前の歴史においてもエンタテインメント産業としての色彩の濃かった米国スポーツの隆盛とあいまって、資本との結びつきを強めたものになっていった。ここに米国の国民的娯楽とも言われる野球のグローバルな拡大に注目する意義を見出すことができる。

ケリーは、米国スポーツの拡大に先んじて世界的に普及したサッカーに比べてのルール複雑さやプロリーグの試合数の多さによる国際試合実施の困難さ、そして、北米トッププロリーグである MLB 主導による国際化の推進の結果としての五輪競技からの削除などを理由に、グローバルスポーツとしての野球という見方には否定的であるが、その一方で、このスポーツが米国の影響の強い地域への普及している事実からスポーツの普及を政治経済のグローバル化の一つの型とみなしている（Kelly：2007）。

現実には野球は現在 116 カ国・地域でプレーされていることから<sup>2)</sup>、その普及は地球規模のものであると言える。その普及先は、現在、米国の政治経済的影響の比較的弱かった地域や、サッカー人気米国スポーツの人気をはるかに凌いでいる中国、イタリア、ブラジルなどの地域にも及んでいる（Gmelch：2006）。

野球の国境を越えた普及に米国の政治経済的影響力の拡大を見たクラインは、早い時期にこのスポーツが普及した中南米カリブ諸国と米国との垂直的関係が、野球に反映されているとした（Klein：1989, 1997）。そして、「文化ヘゲモニー」の時代にそれが普及し、エンタテインメ

ント産業としてのプロリーグが勃興した北米や東アジア，中米カリブ地域から，野球を凌ぐ人気を持つスポーツがすでに存在し，アマチュアリーグしかない欧州や南米，さらには野球不毛の地と言ってよいアフリカなどへの拡大に発展したことに關して，その主要因を MLB の人材獲得網とマーケティングの拡大に求めた (Klein : 2006)。

彼による野球の普及，拡大のモデルは，世界規模でのトップリーグである MLB が北米という枠組みを超えて環太平洋地域，中南米カリブ地域にその事業展開の場を拡大し，これらの地域の各リーグが，事実上の MLB の下部リーグとなっていくというものである。

石原はこれを補完し，米国ユダヤ資本による，従来野球の普及の進んでいなかったイスラエルでの北米への選手送出を目的としたプロリーグ展開の試み (石原 : 2008a, Ishihara : 2010)，北米プロ野球の事実上の下部リーグとしてのメキシコプロ野球の展開とそのファーム組織の拡大 (石原 : 2009)，そして主として途上国に展開される，先進国への人材供給地としての競技レベルの低いプロリーグの，北米や日本といった野球先進国への還流とも捉えることのできる独立リーグの勃興 (石原 : 2010b) といった 21 世紀に入ってからの野球普及の諸相について指摘した。さらに近年注目されている開発援助としての途上国へのスポーツ普及 (岡田 : 2001) もその視座においた上で，「野球不毛の地」アフリカからも底辺のファームリーグである日本の独立リーグへの選手送出を生んだように，途上国援助の一環として行われた野球普及活動でさえ，結果として資本の論理に飲み込まれる可能性をはらんでいることにも言及し (石原 : 2011a,b)，資本との結びつきを強めたプロリーグの世界各地での勃興と，それに伴って拡大する人材獲得網のネットワークを「ベースボール・レジーム」の言葉で示した (石原 : 2010a)。

クラインは，野球の世界的普及と選手育成の場拡大の可能性として，すでに他のスポーツが定着している先進国より，貧困脱出のツールとしての野球の需要が見込める途上国の方に将来性を見出している (Klein : 2006)。しかし，現実には 2010 年シーズンからクラインが野球の将来性に関して悲観視していたイタリアにおいて，本格的なプロリーグを指向した新リーグ (イタリア野球リーグ, IBL) が MLB の支援により活動を始めている。本稿で取り上げる ABL も，IBL 同様，MLB の支援の下で，以前に存在していたプロリーグの再開という形で発足していることから，「ベースボール・レジーム」拡大の一例としての先進国における新興プロ野球の勃興と捉えることができる。

## 2 : オーストラリア野球史<sup>3)</sup>

### 2-1 : 文化ヘゲモニー下における伝来

豪州に野球が伝来したのは，その発祥から間もない 19 世紀の半ば頃であるとされる。メルボルン北方に位置するバララット (Ballarat)，ベンディゴ (Bendigo) 周辺において起こった

ゴールドラッシュの波は、多くの米国人を招きよせることとなり、彼らは採掘道具とともにボールとバットを携えてやって来た。豪州における野球発祥の地は、金鉱の多かった先述の地域であると考えられるが、記録に残る範囲では、1882年にシドニーにおいて豪州における最初の試合が米国人によって行われたという。

欧米からその他の地域への近代スポーツの普及を、強者の文化事象を弱者が自発的に受容する「文化ヘゲモニー」の言葉で表したグットマンは、豪州における野球の伝来を「排他的な英国の文化的影響下にあった場所に、他から別のスポーツが移入した際のケーススタディ」と表現した (Guttmann : 1994,91)。

野球というスポーツは、その草創期に早くも見世物興行として商品化されていった。1869年には、米国において最初のプロ球団が誕生し、1871年には、これがリーグ戦に発展した。このスポーツの興業としての将来性にいち早く目をつけたアルバート・スポルディング (Albert Spalding) は、1888年、メジャーリーガー達を率いて世界一周ツアーを催行した。この際、彼らは豪州にも立ち寄り、シドニー、メルボルン、アデレード、バララットの各試合場には1万を超える観衆が訪れたという。

しかし、スポーツが「文化ヘゲモニー」的に普及していたこの時代、大英帝国の一部であった19世紀末の豪州人の野球に対する認識は、英国スポーツであるクリケットと競合関係にある米国的スポーツというものであり、米国生まれの野球は「品位を落としたラウンダース」でしかなく、エリート層のスポーツであるクリケットの下位に位置する大衆スポーツという枠を超えることはなかった。

それでもスポルディング・ツアーのメンバーだったハリー・シンプトン (Herry H. Simpson) による普及策により、1889年には、ヴィクトリア州対南オーストラリア州による初の州際試合が実施され、1897年には、豪州代表チームによる米国遠征も行われた。翌年には、シドニーにおいてメトロポリタン野球協会が発足するなど組織化への動きもみられるようになり、1912年には、豪州野球協議会 (Australian Baseball Council, ABC) が組織された (Guttmann : 1994, 93)。

しかし、このような状況の下でも、この時期豪州では、あくまで英国スポーツが優勢であり、野球は類似した競技であるクリケットと競合しないよう、冬季スポーツとして実施され、もっぱらクリケット選手のオフシーズンのトレーニングとして競技されるに過ぎなかった。

1920年代は、スポーツの普及における英米の地位の交代時期であるとされるが (マクガイヤー : 1999)、豪州においても、この時期に米国文化の流入の度合いが増した。この中、1926年にはABCが、現在まで続く豪州野球連盟 (Australian Baseball Federation, ABF) に改組され、1934年には、年間王者を決める全国大会であるクラクトン・シールド (Claxton Shield) が始まった (前田 : 2010) <sup>4)</sup>。

第二次大戦が始まると、クインズランド州に駐留していた米兵により、野球の普及は加速化

した。しかし、戦後の1956年に開始されたテレビ放送が、文化面においてのさらなる米国化を助長したものの、このことが野球人気に直接つながることはなかった。

しかし、豪州における米国文化の浸透はやがて野球人気にも影響を及ぼした。1973年以降、ABFは野球を夏季スポーツ化したのが、このことはナイター設備の整備とあいまってスペクテイター・スポーツとしてのアマチュア野球人気に繋がった(Laidlaw: 2010)。

そして、1986年にはクレイグ・シップリー(Craig Shipley)が、豪州人として20世紀最初のMLBデビューを飾った(ABL: 2010, 192)<sup>5)</sup>。

## 2-2: 資本と結びついた普及とプロリーグの盛衰

石原は、資本によって駆動する「ベースボール・レジェム」の拡大は、1990年代以降の世界各地での新興プロ野球リーグの勃興にあらわれているとする(石原: 2010a,b)。豪州にもこのレジェム拡大の波が押し寄せたことは、1989年の豪州初のプロリーグ(旧ABL)の発足が示している。

8チームで開始されたこのリーグの性格は、「直接的不可欠な米国の介入」(Guttman: 1994, 94)という言葉に集約される。

このリーグにおいては、各チーム4人までの外国人選手枠は、MLB傘下の北米人マイナーリーグで占められた。そして資金、運営面においてMLBから援助がなされ、各球団にもMLB球団のスポンサーがついた。さらにはリーグに対して米系多国籍企業のペプシ・コーラがスポンサーとして50万ドルを拠出したことは、このリーグの性格が、グローバル化の中、北米マイナーリーグが海を越えたものであったことを物語っている。また、このリーグのプレーオフがテレビ放送された後、MLBの衛星放送が始まったことは、このリーグがMLBのマーケティング拡大策の一環として行われたことを意味している。

グットマンは、マグワイアが指摘したスポーツの世界における英米のヘゲモニー交代の波が豪州に押し寄せてきたことを認め、「戦後にヨーロッパ大陸から殺到した移民がイギリス風の生活を豪州で複製することに興味を示さなかった」(Guttman: 1994, 95)ことが野球普及の成功につながったとしている。さらに彼は、英国スポーツであるクリケットは、米国スポーツの影響を受け、自ら商業化することにより特有のアマチュアリズムを喪失し、野球に対する反撃を「無駄に終わ」らせたとしている。しかし現実には、現在において、連日の新聞のスポーツ欄では、サッカーやラグビーを抑えてクリケットがトップを飾っている。

結局のところ、1枚5豪ドルのチケットを販売し、リーグ全体で初年度の観客動員を37万6650人しか記録できなかったこのリーグの経営は不安定で、結局旧ABLは、1999年限りで活動を中止した。プロリーグ自体は、インターナショナル・ベースボール・リーグ・オブ・オーストラリア(IBLA)が引き継いだのが、これも2シーズンしか継続できなかった。

3 : ABL の概要<sup>6)</sup>

2010年に冬季リーグ<sup>7)</sup>として発足した新生ABLには、MLBが資本金の75%を拠出していることから(前田:2010)、北米外にできたMLBのファームリーグという性格を持っていることが窺える。その一方で、その残りをABFが出資していることから(前田:2010)、国際大会に向けた国内選手の育成という目的も有していることが窺える。

再開されたプロリーグは国内6都市にフランチャイズを展開し、球場は基本的には新造せず、シドニー・オリンピックの施設やオヴァルと呼ばれるクリケットやラグビー用に造られた古い競技場を使用していた(表1)。野球専用の施設を使用しているのが3球団のみという現実はこの国における野球の地位を物語っている。

表1 : ABL の使用球場 (ABL (2010)、フィールドワークにおける景観調査に基づき著者作成)

都市	施設名	形態	立地	備考
シドニー	ブラックタウン・オリンピックパーク	野球専用	郊外	シドニー五輪野球競技のサブ球場
パース	バーバガロ・ボールパーク	野球専用	郊外	
アデレード	ノーウッド・オヴァル	多目的	郊外	地元オージーフットボールチームの本拠地
メルボルン	メルボルン・ショージュランド	多目的	市内	
ブリスベン	RNAショージュランド	多目的	市内	農業祭エッカ会場のオヴァル
キャンベラ	ナラバンダ・スタジアム	野球専用	郊外	ABL開幕に合わせて改築

\*アデレードの球場は、命名権契約によりクーパースタジアムと改名

観客動員を見ても、プレーオフを含めたリーグ全体の1試合あたりの1283人の観客動員数(表2)は、いまだ野球はこの国においては人気スポーツではないことを示している。

リーグ戦のフォーマットは、11月初めから2月中旬までのレギュラーシーズンで6チームが計115試合を行い<sup>8)</sup>、その上位4チームによる3段階のプレーオフで優勝チームを決定するというものであった<sup>9)</sup>。

表2 : 2010-11ABL 観客動員数 (ABL ウェブサイトより)

球場	動員数	試合数	1試合平均
シドニー	23076	17	1357
パース	19350	17	1138
アデレード	24917	17	1466
メルボルン	15178	15	1012
ブリスベン	14247	12	1187
キャンベラ	17255	15	1150
レギュラーシーズン計	114023	93	1226
プレーオフ	18167	10	1817
総計	132190	103	1283

リーグ当局は、将来的には隣国のニュージーランドも含めた球団数の拡大も視野に入れ、今後5シーズンは活動を行うことを表明していた<sup>10)</sup>。

#### 4:「ベースボール・レジーム」上の ABL

早い時期からその発祥の地、米国において興行として観客を集めた野球は、プロ発足後しばらくの間は、各地に大小のリーグが乱立していた。その後、大都市に拠点を置くナショナル、アメリカンの両リーグを「メジャーリーグ」としてその頂点に頂き、その下にマイナーリーグが中小都市に展開されるようになった。そして、1920年代からトップリーグである MLB を頂点とし、マイナーリーグがそのファームとして選手の育成を請け負うという、現在の形に組織化されていった。このメジャーリーグとマイナーリーグの間の支配-従属関係は、1950年代以降、北米野球と中南米カリブ地域のプロリーグとの間にも構築されるようになり、やがてそれは強化され、1990年代には東アジアのプロ野球リーグにも拡大していった。そして現在においては、各国のプロリーグによる人材獲得網が野球の普及策と並行する形で世界規模に拡大している。以下においては、MLB を頂点とする資本の移動や人材獲得網の展開をつうじた世界各地の野球リーグの階層化したネットワークを「ベースボール・レジーム」とする視点から ABL を分析していく。

##### 4-1: MLB のファームとしての ABL

2010-11年シーズンの ABL 参加選手の 2010年夏季シーズンにおける所属、及びプロ経験の有無は以下の通りである(表3)。

表3: 2010-11ABL 所属選手の夏季シーズンの所属とプロ経験(ABL ウェブサイトより筆者調べ)

チーム	総計	現役プロ	MLB	NAPBL	LMB	IND	NPB	JIND	KBO	IBL	元プロ	その他
シドニー	37	18	2	14	1	0	0	0	1	0	11	8
パース	44	13	1	12	0	0	0	0	0	0	8	23
アデレード	43	9	0	7	0	0	0	0	2	0	12	22
メルボルン	45	19	1	5	1	3	7	1	0	1	16	10
ブリスベン	38	16	0	12	0	1	3	0	0	0	8	14
キャンベラ	36	16	0	9	0	1	0	0	6	0	8	12
計	243	91	4	59	2	5	10	1	9	1	63	89
割合(%)	100	37.4	1.6	24.3	2.2	2.1	4.1	0.4	3.7	0.4	25.9	36.6

\*NAPBL は MLB 傘下の北米マイナーリーグ、LMB はメキシコリーグ、IND は北米独立リーグ  
NPB は日本プロ野球、JIND は日本独立リーグ、KBO は韓国プロ野球、IBL はイタリアリーグ

シーズンを通して計 243 人の選手登録がなされたが、2010年の夏季シーズンに国外のプロリーグでプレーしていた「現役プロ」と呼べる選手は 37.4% にあたる 91 人で、そのうち 65 人



が北米プロ野球のオーガナイズド・ベースボールに所属していた<sup>11)</sup>。また、オーガナイズド・ベースボールへの選手供給を目的のひとつとしている北米独立リーグに所属する選手が5人、そして、ABLと同じくMLBの出資により2010年に発足したイタリアプロ野球リーグに所属していた選手も1人確認できたことから、ABLが北米野球への選手供給の役割を担っていることが窺える。「元プロ」の選手も、そのすべてが北米でプロキャリアを積んでいたものであった。彼らの中に、一旦北米プロ野球を「引退」した後、北米や他国のプロリーグに「現役復帰」した者がいることを考え合わせると、MLBのファームリーグとしてのABLの役割が際立ってくる。

選手の出身国に目を移してみると(表4)、北米から27人の選手がABLに参加していることが見て取れる。彼らのほとんどは、独立リーグを含む北米のマイナーリーグ球団に所属していた者であった。クラインは、ドミニカ共和国に代表される中南米カリブ地域の冬季プロリーグが、現在においてMLBを頂点とする北米プロ野球の事実上のファームリーグとして、現地人だけでなく北米人マイナーリーガーを育成する役割を担っているとするが(Klein: 1991b, 34-46)、主要なプロ野球リーグが存在する北半球と季節を異にする豪州に展開されるABLも、北米人マイナーリーガーにとって、オフシーズンの雇用とトレーニングの場を提供していると言える。

表4: 2010-11ABL所属選手の出身国 (ABLウェブサイトより筆者調べ)

チーム	総計	豪州	米国	カナダ	日本	韓国	NZ	南ア	インド	英国	オランダ	不明
シドニー	37	33	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1
パース	44	36	7	0	0	0	0	0	0	0	0	1
アデレード	43	34	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0
メルボルン	45	31	4	1	7	0	0	1	0	0	0	1
ブリスベン	38	29	1	0	4	0	1	1	0	1	0	1
キャンベラ	36	23	3	2	0	6	0	0	1	0	1	0
計	243	186	23	4	11	7	2	3	1	1	1	4
割合 (%)	100	76.5	9.5	1.6	4.5	2.9	0.8	1.2	0.4	0.4	0.4	1.6

\* 「南ア」は南アフリカ共和国、NZはニュージーランド

また、表3の「その他」は、そのほとんどがプロキャリアのない豪州人選手である。石原は、広義のMLBのファームリーグとしてイスラエルに発足した短期興行の新興プロ野球リーグが、欧米人にとっての夏休み期間中に開催されたことは、プロ経験のない選手にとって、プロとしての自己の技能の将来性を試す機会を提供していたことを指摘した(石原: 2008a, Ishihara: 2010)。ABL以前のプロキャリアを確認できなかった「その他」に分類された選手にとって<sup>12)</sup>、自分が職業として野球選手を選択できるのか、つまり国外でプロ選手としてプレーできる技能があるのかどうかを推し量る場として、ABLは、イスラエルの新興プロ野球と同様の機能を

果たしていたと考えられる。

また、日本の独立リーグに所属していた日本人選手1人と、韓国の KBO から参加した選手のうち、KBO 球団を自由契約になった選手1人が ABL に渡っているが、この2人は、MLB 球団のスカウトの仲介によって移動した者であった。

石原は、「ベースボール・レジーム」を論じる中で、MLB が北米外に設置したドミニカ、ベネズエラのルーキー級マイナーリーグに、地元出身者以外の者が参加していることに注目した。そして、これを MLB による地球規模のスカウト網と選手育成の場の拡大の結果、本人の意思に関わることなく国際移動をするようになった新たな形のアスリートの越境であるとし、「育成型」のスポーツ労働移民の枠組みを設定した（石原：2010a）。上記2人のアジア人選手も、次項で触れる野球の普及度が低い地域の出身者と同様に、世界各地に勃興する MLB にとっての事実上のファームリーグにおいて育成される、地球規模に拡大した MLB の人材獲得網にかかった、プレー経験の比較的浅い、あるいはプレーレベルの高くない選手の事例であると捉えることができる。

さらに言えば、このリーグは MLB にとってのファームにとどまらない。日本の NPB や韓国プロ野球（韓国野球委員会、KBO）から派遣された選手が、このリーグでプレーしていたことは、ABL が地球規模のプロ野球の人材育成のネットワークに組み入れられていることを示している。このことは、資本との結びつきを強めたスポーツのグローバル化の潮流の中発生したリロケーションされた人材育成の場というこのリーグの特徴を浮かび上がらせている。

#### 4-2：冬季リーグとしての ABL

中南米カリブ地域のプロ野球リーグの多くは、現在冬季リーグとして北米オーガナイズド・ベースボールの補完的な役割を担っている（Klein：1989, 石原：2008b）。MLB 球団は、傘下のファームチームに所属するマイナーリーガーを冬季リーグに派遣することにより、彼らに実戦経験を積ませている。北米での夏のシーズンにおいて、ともにプレーすることのないメジャーリーガーも参加する冬季リーグは、マイナーリーガーにとって絶好のスキルアップの機会である。北半球における冬に実施される ABL も、他国でのプロ経験のない地元選手やプレー経験の浅い選手にとって中南米カリブ地域の冬季リーグと同様に機能している。また、シーズン中にしか給与の支払われないマイナーリーガーにとっては、冬季リーグへの参加は、収入を補完する役割を果たしている。

しかし、異文化圏でのプレーや生活は、選手には大きなストレスとなる（Klein：1991b, 83-90, ホワイトティング：1980, 1990）。その点において、スペイン語圏の途上国・地域で開催される中南米カリブ地域の冬季リーグへの選手の派遣は、MLB 球団にとってもリスクを伴う。そのため、MLB はマイナーリーガーの育成の場として、米国内においても、マイナーリーグのシー

ズン終了後に教育リーグを開催しているのだが<sup>13)</sup>、同じ英語圏で先進国である豪州において行われる ABL は、これら米国内の教育リーグの延長線上に位置づけることができる。

2010-11 年シーズンにおいて、ABL に登録された選手の約 4 分の 3 は豪州出身者であった。外国人選手は、全体の約 1 割を占める米国、カナダの北米出身者、プロリーグの存在する日本、韓国の東アジアのほか、インド、オランダ、隣国のニュージーランド出身者の計 49 人であった (表 4)<sup>14)</sup>。彼らのうち、29 人は夏のシーズンを北米プロ野球で送っていた。

彼らは、ABL がなければ、9 月から翌年のスプリングトレーニングが始まる 2 月まで<sup>15)</sup>、北米や母国でトレーニングしながら他の仕事にするか、言語あるいは文化的に大きな隔たりのある中南米カリブ地域の冬季リーグでプレーしなければならない存在である。MLB の親球団にとっては、北米以外の野球の普及度がまだ高くない地域からスカウトしてきた選手を、異国である米国の文化になじませながら野球経験を積ませるには、言語・文化的共通点の高い豪州という地は格好の場であると言える。

また、豪州人マイナーリーガーにとっても、北米でのオフシーズンに母国でプロリーグが開催されることは、収入の補完、トレーニング両面においてメリットをもたらす。さらに言えば、他国でのプロ経験のない者、あるいは他国でのプロ契約を失った選手にとっては、MLB のスカウトが見守るこのリーグでの活躍は、格好のアピールの場となる<sup>16)</sup>。

但し、各国リーグのスカウト網にかかるには、このリーグの高いプレーレベルが担保されなければならない。ABL には日本、韓国から計 18 人の選手が参加していたが、このうち 15 人は両国のプロ球団から派遣された選手であった<sup>17)</sup>。NPB、KBO は、オフシーズン中も契約選手に給与を支払っている。従って ABL はこれらのリーグに所属する選手に対しては、実戦経験の場の提供という立場をとり、報酬の支払いは行っていない。このことは、運営費節約とともに、リーグのプレーレベル向上にも大いに役立っている<sup>18)</sup>。

#### 4-3：豪州野球にとっての ABL

しかし、これまで述べた要因からは、野球の人気が決して高いわけではない豪州にプロリーグが復活したことは十分には説明がつかない。石原は、グローバル化の進展により、プロスポーツ資本にとってのファームリーグが「脱領域化」(アパデュライ：2002)した結果、「野球不毛の地」に出現したことを述べたが、ここで取り上げたイスラエルも国内事情として WBC 参加に向けた国内選手育成をプロリーグ発足の要因として抱えていた (石原：2008a)<sup>19)</sup>。

国威発揚のツールとしてのスポーツが重要視される現在において、豪州も国際スポーツ大会で入賞できるレベルの自国選手、チームの強化に力を入れている (Nauright:2004)。野球に関してもグローバルな舞台における成績向上を目指していることは、ABL に対して 25% の出資を ABF が行っていることが示唆している。

豊かな先進国である豪州の若者にとって、将来のキャリアについて様々な可能性がある中、国外の球団と契約してのプロ野球選手という職業は、非常にリスクの高い進路であると言える。野球のさほど盛んでない豪州から海を渡る野球選手には、国外のトッププロリーグで入団後すぐ活躍できるレベルの者は少ない。経験の浅い彼らは、行先では、育成の対象でしかないことが多く、ファームリーグからキャリアを上昇させていくことになる。つまりは、雇用者にとっては、豪州人選手のほとんどは、収益を生み出す「装置」ではなく、あくまで、「装置」に仕立てるべく「製造」する対象であるか、または、将来の「装置」を「製造」するための実戦相手という「触媒」としての役割しか果たさないのである。

豪州からは、北米のマイナーリーグだけでなく、かつては日本の独立リーグへも野球選手の移動がみられた。このような豪州人選手の越境のフローを考えると、国外のプロリーグでプレーする選手も参加する短期のプロリーグが、国内に存在することによって、地元のプロ経験のなかった選手が自己のプロとしての力量をはかることができるという点で、ABLは有効に機能していると言える。

つまり、ABLは、豪州人選手にとってのプロへの登竜門の機能を果たしており、今後、ABLから北半球にある、より上位のプロリーグへというアスリートのフローが構築されることが予想される。そして、国内にプロリーグがあることによって、国外でプレーした選手が帰国後、指導者や球団スタッフなどとして国内の野球の発展に貢献することもできる。このことは、豪州が単なる選手の供給地としてではなく、プロリーグの展開によって、自国にも利益を得ることを示している。

## 5：ABLの可能性

### 5-1：セミプロ：先進国における新たなプロ野球の形

旧宗主国である英国生まれのクリケット、サッカー、ラグビーに加え、ナショナル・スポーツとも言えるオージー・フットボールがすでにスペクテイター・スポーツとして人気を博している豪州において、野球がプロスポーツとしてこれらを凌駕することは難しいものと思われる。このような環境の下、この国にプロリーグが再開されたことは、「ベースボール・レジェム」の拡大と発展という背景抜きには考えられない。MLBを頂点とする地球規模の人材獲得網とマーケティング網のネットワークの下では、多少なりとも野球普及の歴史があり、競技者も少なくない豪州に冬季プロ野球リーグが出現することは、北半球各地のプロリーグにとって、選手の育成、人材の獲得、さらにはマーチャンダイズや放送権の販売という視点から有益なことであると考えられる。

しかし、国民一人あたりのGDPが約4万9000ドル<sup>20)</sup>というこの国にあって、月2000から

5000ドルという低報酬<sup>21)</sup>かつ、4ヶ月弱という短期間のプロリーグは、中南米カリブ地域の冬季リーグと同様の貧困脱出のツールにはなり得ない<sup>22)</sup>。

賃金水準の高い豪州にあって、マイナーリーガーとして北米に渡っても、早い段階で見切りをつけ、帰国する選手は多い。プロアスリートという職業の持つ特質上、一流選手として成功しない限りは、安定した生活を営むことは、先進国出身者には困難だからである。

逆に言えば、北米マイナーリーグレベルでなら十分プレーできる者が、豪州のアマチュアリーグには多数いることになる。彼らの多くは、北米でのプロキャリアを終えて帰国した後も、ローカルチームと呼ばれる居住地のアマチュアクラブでプレーを継続する。また、北半球と季節が逆であるという気候から、北米やアジアのプロリーグの現役選手も、オフシーズンは、ローカルチームに所属してトレーニング代わりにプレーする<sup>23)</sup>。このような状況は、豪州のアマチュア野球の高いレベルとなって現れ、そのため、プレーの場を求めた外国人選手も集まってくる<sup>24)</sup>。このような、現役プロ選手やプロ経験者も参加する豪州のアマチュアリーグは、MLBのスカウティングの対象となり、実際現在もMLBで活躍するピータ・モイラン (Peter Moylan) 投手のように一旦、北米プロ野球から引退しながら、豪州アマチュア野球でのプレーから、現役復帰し、メジャーリーガーにまで上りつめた事例も起こっている。

ABLはこのようなプレーレベルの高いアマチュア野球から選手を選抜し、MLBを初めとする外国のプロリーグから送られた選手とあわせてより高いレベルでの選手の育成を目論んだものであると言える。

北米のプロ野球選手は、シーズン中は野球に専従して各地を転戦し、報酬を得るリーグをプロリーグ、試合出場に関しては報酬が出るが、選手は他職を兼業し、むしろ野球よりも他職が本業としているリーグをセミプロリーグとして区別する。そのような北米からの視点では、ABLはプロリーグというよりもセミプロリーグに近いものである。ABLのロースターの内、野球に専従していたのは国外のプロリーグに所属していた4割に満たない選手であった(表3)。また、豪州人選手186人中、夏季シーズンにおけるプロリーグとの契約が確認できなかった選手は88人にのぼる<sup>25)</sup>。兼業している豪州人選手が多く、国外のプロリーグに所属している選手も自宅に帰省中であったという事情から、選手は基本的に地元球団所属であり、従ってチーム間の選手トレード移籍もなかった。また、試合は兼業選手が参加できるよう週末に行われた。

このような、選手に対し野球への専従を求めない運営のあり方は、今後のプロ野球のグローバルな拡大、特に先進国への野球の普及を見据えたプロリーグの運営を考えるに当たって現実的な方法であると言える。クラインは、MLBの人材獲得網拡大の一環としてのヨーロッパへのプロリーグの発展に関して、経済的に満たされたこの地域では、中南米カリブ地域のような野球を通しての富の獲得は、有効な誘因になり得ないと指摘しているが (Klein:2006,170-195)、ABLのようなセミプロリーグの発展形とでも言うべき運営は、今後の野球普及度の低い先進

国への「ベースボール・レジェーム」拡大の可能性を示唆するものである。

## 5-2: 「ベースボール・レジェーム」の拡大先としての豪州

先進国への野球普及は、人材獲得網の拡大に留まらず、マーケティング網の拡大という点において、野球ビジネスにとって大きな魅力がある。将来の経済発展が見込めたものの、野球普及の進展がはかばかしくなかったことから、スポンサーとなっていた日系企業が撤退した中国プロ野球に比べ、野球普及の歴史の継続性があり<sup>26)</sup>、経済的にも豊かな豪州は、選手獲得に伴うマーケティングの拡大に大きな可能性を秘めている。北米プロバスケットリーグ(NBA)が中国人選手、姚明を獲得し、あるいはMLBが日本人選手、野茂英雄を、また韓国人選手、朴賛浩(パク・チャンホ)を獲得したことによってアジアへのマーケティングを推し進めたことと同じ現象を、MLBだけでなくNPBなどアジアのプロ野球も豪州に対して期待できる。

現実にはこれまで28人の豪州人選手がMLBでプレーしたが(ABL:2010, 192)、このことがMLBの豪州へのマーケティング拡大に関して大きく影響したわけではない。しかし、豪州の経済的豊かさは、野球人気の向上に伴うマーケティングの拡大に大きな可能性を見込める。そのために、国内プロリーグの開催は大きな役割を果たすことができる。

実際、ABL初年度シーズン終了後、NPBへも豪州人選手が移動した<sup>27)</sup>。この動きは、単なる選手獲得網の拡大と言うよりは、放送権の販売やグッズの販売などを見据えたマーケティングの拡大を目論んだものと考えられる<sup>28)</sup>。

### まとめ

以上、本稿においては2010年11月に再開された豪州のプロ野球リーグを、現在拡大しつつあるMLBを頂点とする国境を越えた各国リーグの人材獲得、マーケティングのネットワークである「ベースボール・レジェーム」の分脈に乗せることにより、その再開の要因、存在意義を探った。

国境を越えた巨大エンタテインメント産業化するスポーツにおいて、人材獲得網とマーケットの拡大は、そのスポーツがスペクテイター・スポーツとして生き残る条件であると言える。

1990年代に一旦誕生しながら消滅した豪州のプロ野球が、MLBの出資により2010年に再開されたことは、現在の野球の普及、拡大が、MLBの人材獲得網の拡大と同義であることを裏付けている。

北米資本の援助を受けはしたが、国内資本中心の運営では、マイナースポーツの域を脱しない野球のプロ化が、この国において持続可能なものではなかったことは、旧ABLとそれを引き継いだIBLAが計12シーズンしか継続できなかったことが示している<sup>29)</sup>。しかし、その一

方で、プロ野球の灯が一旦消えた2001年にMLBの野球アカデミーがこの国に開設されたことは、選手プールとしての豪州の有望性を示している。

北米外での試合開催や選手獲得を中心とするMLBの国際戦略が活発化した1990年代以降、かつてローカルなプロ野球リーグが存在しながらも、MLBによるスカウティング網の拡大により有望選手を奪われ、興行的魅力をなくして消滅した、コロンビア(1993年)、パナマ(2000年)、ニカラグア(2004年)などの中南米のプロ野球リーグが再開されたが、このことはMLBによる選手獲得網がさらに拡大し、北米外における選手育成の場の必要性が益々高まっていることを示している。これらのリーグは、選手や指導者のフローなどを通じて独立リーグを含む北米プロ野球と関係を築いているが、これらのリーグが再び消滅したり、休止したりしていることは、ローカル資本によるプロ野球経営の不安定さも物語っている。2007年に在米ユダヤ資本により開始されたイスラエルプロ野球が1年限りで消滅したことも同じ文脈で語ることができる。

「ベースボール・レジーム」拡大の中、そのレジームの頂点に位置するMLBは、選手獲得網をグローバルに拡大し、選手育成の場を北米外に求めるようになってきている。クラインに代表される先行研究においては、これら選手獲得網と選手育成の場の拡大の場として、中南米カリブ地域がその射程として挙がるが多かった。しかし、先進国であり、英語圏という中南米カリブ地域に対する優位性は、MLBにとって、豪州人選手の発掘の場としてだけでなく、北米出身のマイナーリーガーに加えて、レジームの拡大の結果として世界各地からスカウトしてきた野球競技経験の浅い選手を育成する場としての豪州の将来性を浮かび上がらせる。さらには、NPBなどのアジアのプロリーグからの選手派遣は、ABLの勃興が、1990年代以降世界各地で興った新興プロ野球リーグと同じく、「ベースボール・レジーム」の拡大の分脈で語られるべきものであることを示している。

クリケット、サッカー、オージーゲームなど、他のスペクテイター・スポーツがすでに人々の支持を得ている豪州にあって、このリーグが、北米や東アジアのプロリーグのように半年以上にわたって興行を行う本格的なものになることは考えにくい。しかし、「ベースボール・レジーム」拡大の中、ABLは、季節が真逆であるという特性を生かしてMLBを初めとする北半球のプロリーグのファームとしての役割を果たす小規模のリーグとして継続していく可能性を持っている。このようなリーグは、野球の普及度が低い先進国における新興プロ野球のモデルケースとなるであろう。

給与水準が高く、他のスポーツの人气が優勢である地域における野球の普及と人材獲得網としての将来性に、クラインは悲観的な観測をしている(Klein:2006)。しかし、他国でのプロ経験のない、あるいはかつて他国でプロとしてプレーしていた選手に兼業を許し、また、北半球各国のプロリーグが有望株選手を派遣し、これに他国でプレーしている国内の現役プロ選手

が加わるというセミプロ方式のリーグは、MLB にとっての北米外におけるファームリーグとして有望なモデルであると言える。かつての白豪主義から多文化主義へと大きく舵を切り替えた豪州には、野球を含むすべてのスポーツに発展の可能性があるという点においても、ABL が今後さらに発展することが期待される。アジアのプロリーグにとっても、オフシーズンの選手育成の場として豪州が有望であることは、ABL の初年度優勝チームが、2011 年シーズン後に再開されるアジア・シリーズに参加することが決定したことにも表れている。

本稿で取り上げた ABL や、これに先んじて 2010 年春にリーグ戦を開始したイタリア野球リーグの例を考えると、「ベースボール・レジェーム」拡大の中、今後、同様の新興プロ野球リーグが野球の普及度の高いとは言えない先進国に興る可能性が考えられる。

資本の論理により拡大する「ベースボール・レジェーム」は、野球をグローバルビジネスとして利用する資本を乗せた大きな乗り物に例えることができる。それが駆動するためには、車輪が必要となる。その車輪は、野球の技能を持って巨万の富を築く MLB のトップ選手という大きな車輪であったり、世界各地の事実上のファームリーグでプレーする低報酬の未熟なプレーヤーという小さな車輪であったりする。レジェームが肥大化すればするほど、それを動かすのに必要な車輪の総数は増加するのだが、個々のアスリートが、その車輪のパーツになるか否かは、いわば燃料にあたる個々のレジェームに対する認知に委ねられている。したがって、先進国のアスリートが「ベースボール・レジェーム」を駆動させる車輪になるか否かも、彼らの目をどう野球に向けさせていくのかにかかっている。これについては、石原 (2011c) がすでに指摘した通り、若者の学卒後の正規雇用という受け皿が縮小している現在において、プロスポーツが逃避の場を提供している現実もまた存在する。つまり現在起こっている先進国での小規模プロ野球リーグの勃興は、資本による人材獲得網、マーケティング網の拡大である「ベースボール・レジェーム」と先進国社会における若者を取り巻く状況の変化によって起こった現象であると言える。

本稿で取り上げた ABL の事例からは、現在地球上の誰もがその波に巻き込まれつつあるグローバル化という現象の中、その現象にどのようにアプローチしていくかは、その中に生きる我々個々の認知が大きく関わっていることも、また窺うことができる。

## 注

- 1) この翻訳論文においては「マグワイア」は「マグガイヤー」と表記されている。
- 2) IBAF 加盟国の数字 (『ベースボール・マガジン』34 (6), 102-103)。
- 3) この項に関しては、Guttmann (1994, 91-96), 前田 (2010) に依るところが大きい。
- 4) 後に始まった旧 ABL, IBLA, 現 ABL のプロリーグは、このクラクトン・シールドの大会として実施された。
- 5) 豪州人最初のメジャーリーガーは、1884 年にセントルイス・マルーンズ (Maroons) でプレーした 200 (200)



- ジョー・クイン (Joe Quinn) である。
- 6) 本稿執筆に当たっては、資本との結びつきを強めたプロスポーツの人材獲得網のネットワーク拡大の結果として、プレーレベルの低いプロ野球リーグが世界各地に出現し、そこにおいては、従来のスポーツ労働移民研究の射程には入っていなかったアスリートの移動が発見できるという仮説の下、豪州にてフィールドワークを実施した。調査は、リーグ当局の許可と協力の下、2010年12月29日から2011年1月8日まで、ABL各球団の本拠地であるブリスベン、アデレード、メルボルン、シドニー、キャンベラにおいて、町、球場での景観調査、リーグ関係者および選手へのインタビューを中心に行った。インタビューは、日本人に対して以外は、すべて英語で行った。但し、韓国人選手に対しては、基本的に韓国球団が派遣していた通訳を介してインタビューを実施した。
  - 7) 「冬季リーグ」の語を使用する場合、この「冬」は北半球における冬であり、豪州においては夏に当たる。
  - 8) 当初リーグ当局は、各チーム40試合、計120試合のレギュラーシーズンを予定していたが、豪雨によるアデレードの水害による試合中止や、プレーオフ進出に関わる順位が確定したこともあって、何試合かを実施せずレギュラーシーズンを打ち切った。
  - 9) プレーオフは、独自の方式で実施された。1次プレーオフではレギュラーシーズンの1位チームと2位チームが争い、勝者はファイナル・シリーズへ進出し、敗者は2次プレーオフにまわり、同時に実施される3、4位チームの勝者とファイナル進出をかけて争う。各シリーズはいずれも2戦先取の3戦方式で、レギュラーシーズンの上位チームのホームグラウンドで実施された。
  - 10) IBL 国際渉外部デニー丸山へのインタビュー, 2010.12.31, ブリスベン・RNA ショーグラウンド
  - 11) オーガナイズド・ベースボールとは、MLBとその傘下のファームリーグの総称で、メキシコのプロ野球(LMB)もこれに属している。
  - 12) フィールドワークにおけるインタビュー調査でも、彼らの多くは豪州の大学や高校を出たばかりの若い選手であったことが確認された。
  - 13) MLBは、マイナーリーグのシーズン終了後に開催する教育リーグとして、1992年にアリゾナ秋季リーグ、1993年にハワイ冬季リーグを発足させた。ハワイ冬季リーグは、1997年シーズン後に中断し、2006年に再開されたが、その後2008年シーズンを最後に廃止された。
  - 14) 英国出身者1人、南アフリカ共和国(南ア)出身者3人に関しては、現在は豪州に在住し、豪州国籍も取得していたので、外国人とは扱わなかった。南アに関しては、彼ら3人にこの国出身者を祖父母に持つ1人を加えた4人は、2009年WBCの南ア代表に名を連ねていた。
  - 15) 北米プロ野球においては、スプリングトレーニング中は、球団から給与は支払われず、ミールマネーと呼ばれる食事手当だけが支給される。また、独立リーグに所属する選手は、公式戦の行われる5月半ばから8月までのみ給与が支払われる。
  - 16) 例えば、2004年アテネ五輪のエース投手で、日本でもプレー経験のあるクリス・オクスプリング(Chris Oxspring)は、肘の故障から2010年シーズンをリハビリで過ごしたが、ABLでの活躍が認められてMLBデトロイト・タイガースとのマイナー契約を勝ち取った(フィールドワークにおけるインタビュー, 2011.1.7, ブラックタウン・オリムピックパーク)。また、北米マイナーリーグからNPBに移動し、その後、韓国でプレーしたエイドリアン・バーンサイド(Adrian Burnside)は、2010年シーズン限りでKBOネクセン・ヒーローズを自由契約になっていたが、ABLでのプレーを経て、2011年は台湾プロ野球でプレーした。
  - 17) それ以外の両国人3人もそれぞれ母国においてプロ経験を持っていた。そのうちの1人、韓国人投手

- 具台晟（ク・デソン）は、NPB、MLBでもプレーした経験を持ち、2010年シーズン後KBOから引退し、ABLに参加した。彼の存在がABLのプレーレベルを向上させたのは間違いない。
- 18) プレーレベルに関して、当初疑問を呈していたNPB球団もリーグ戦を実見して、そのレベルの高さに驚いていたという。2010-11年シーズンの選手派遣を行った球団は、読売、ソフトバンクの2球団にとどまったが、来季からはさらに参加球団が増える見込みである（IBL国際渉外部デニー丸山へのインタビュー, 2010.12.31, プリスベン・RNA ショーグランド）
  - 19) 結局、イスラエル野球リーグの目指していた2009年WBCへのイスラエルの参加は実現しなかったが、予選が導入された次回2013年大会への参加が決定した。
  - 20) 2009年の数字。（外務省ホームページ; <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html>, 2011.7.20 閲覧）
  - 21) ABL パース球団監督ブルック・ナイト（Brooke Knight）へのインタビュー（2011.1.7, ブラックタウン・オリンピックパーク野球場）より。彼の話によると、最高額の月5000ドルの報酬を手にするのは北米でMLBでのプレーを前提としたメジャー契約を勝ち取ったようなごく一部の選手だけであった。また、日本の独立リーグでプレーしていた日本人選手が、シーズンで手にした報酬は、わずか800豪ドルであった。
  - 22) 先進国のアスリートが、その豊かさゆえに、富の獲得ではなく、競技の追求や自己実現のために国境を渡ってプロアスリートになる事例が報告されているが（石原：2010c）、ABLにおいても同様の理由で、リーグに参加している選手の存在も確認された。
  - 23) 彼らの多くは、ABL発足後もローカルチームに所属していた。これは球団によっては、他に職を持っている豪州人選手の多さから、試合のない平日にはチーム全体での練習を行わない球団があったため、平日の実践練習の場を確保するためだと考えられる（フィールドワークにおける複数の選手、関係者へのインタビュー）。このような事情から、国外のプロリーグに所属する豪州人選手には、国外の所属チーム、ABLでの所属チーム、ローカルチームの3つの所属チームが存在することになる。
  - 24) フィールドワークにおいても、北半球のプロリーグでプレーの場を失った選手の参加の事例が発見された。日本の関西独立リーグからは2人の選手がローカルチームに所属していた。この内1人は、ABLにも参加し、その後、北米独立リーグ球団と契約した。また、ABLキャンベラ球団に参加していたカナダ人選手は、大学卒業後、豪州に野球留学し、ローカルチームでプレーしたが、ABLのトライアウトを受験して、これに合格し、プロ契約を勝ち取った（カナダ人選手へのインタビュー, 2011.1.8, キャンベラ・ナラバンダスタジアム）。
  - 25) 表3において「その他」に分類されている選手は夏季リーグでのプロ契約の確認できなかった者である。この内、1人を除いて全員が豪州人だった。
  - 26) 中国へも早い時期に野球が普及していた。1846年という野球伝来の時期は日本より古く、豪州と大差はない。しかし、その後の米国との関係、特に第2次世界大戦後の新中国誕生後の米国スポーツに対する批判的な政権の姿勢は、この国での野球の歴史の中断を生んだ（Reaves：2006）。
  - 27) ABLメルボルン・エーゼズの投手、アダム・ブライト（Adam Bright）はNPB読売球団と育成契約を結んだ。また、プリズベン・バンディッツの選手1人もNPB福岡ソフトバンク球団の入団テストを受けた。
  - 28) NPBオリックス球団は、2011年シーズンにあたって、韓国人スター選手2人の獲得により、韓国への試合放送権販売に成功し、これを足掛かりに親会社の韓国への事業拡大を実施している。豪州に対しても将来的には同様の効果が期待できる。

29) 実際には、旧 ABL を引き継いだ IBLA は、2 年目のシーズンを実施せず、国内大会のクラクトン・シールドのみを実施し、そのままリーグ自体を休止した。ABL 関係者のひとは、豪州プロ野球が一旦休止したのは、資金面よりも運営面に問題があったからだとしていた。(デニー丸山へのインタビュー、2010.12.30, ブリスベン・RNA ショーグランド)

#### 参考文献

ABL (2010). *Australian Baseball League Official Program*

アバデュライ, アルジュン, 門田健一訳 (2002). 「グローバル文化経済における乖離構造と差異: グローバル/ローカルな空間の論理」『思想』933, 5-31.

Gmelch, George (ed.) (2006). *Baseball without Borders: The International Pastime*, University of Nebraska Press.

Guttman, Allen (1994). *Games and Empires: Modern Sports and Cultural Imperialism*, Columbia University Press.

石原豊一 (2008a). 「ベースボール拡大の諸相—イスラエルプロ野球にみるスポーツ産業のグローバル化」, 『スポーツ産業学研究』18 (2), 21-29.

——— (2008b). 「ベースボールにみるグローバル化—MLB によるドミニカプロ野球包摂を中心に」, 『立命館国際研究』21 (1), pp.111-129, 2008.

——— (2009). 「ベースボールにみるグローバル化 (2) —メキシコ野球にみるローカリティ」, 『立命館国際研究』22 (2), 179-200.

——— (2010a). 「プロ野球をめぐるグローバルな相互連関関係 = 「ベースボール・レジーム」の構築と拡大についての一考察—2008 年世界プロ野球におけるスポーツ労働移民の分析から—」, 『ベースボールロジー』11, 46-78.

——— (2010b). 「独立野球リーグの現状—企業スポーツからプロリーグへ—」, 『体育の科学』60 (5), 318-322.

——— (2010c). 「プロスポーツのグローバル化における「スポーツ労働移民」の変容—「野球不毛の地」イスラエルに集う「プロ野球選手」の観察から」, 『スポーツ社会学研究』18 (1), 59-70.

——— (2011a). 「開発援助アクターとしてのスポーツ NGO—ジンバブエ野球会の事例から—」, 『立命館人間科学研究』22, 97-106.

——— (2011b). 「グローバルスポーツに包摂されるアフリカスポーツを通じた開発援助とスポーツ労働移民—」, 『アフリカ研究』79, 1-11.

——— (2011c). 「現代社会における若者の現実逃避的行動についての一考察—「自分探し」の延長線上のプロアスリート—」, 『立命館人間科学研究』23, 59-74.

Ishihara, Toyokazu (2010). *Eretz Ball: Qualitative Change of Professional Sport Watching in Israel Baseball League*, *Ritsumeikan Annual Review of International Studies*, 9, 187-204.

Kelly, William W. (2007). *Is Baseball a Global Sport? America's 'National Pastime' as Global Field and International Sport*, in Richard Giulianotti & Roland Robertson ed., *Globalization and Sport*, Blackwell, 79-93.

Klein, Alan M. (1989). *Baseball as Underdevelopment: The political Economy of Sport in the Dominican Republic*, *Sociology of Sport Journal*, 6, 95-112.

——— (1991a). *Sport and Culture as Contested Terrain: Americanization in the Caribbean*,

*Sociology of Sport Journal*, 8, 79-86

————— (1991b). *Sugarball: The American Game, the Dominican Dream*, Yale University Press.

————— (1997). *Baseball on the Border: A Tales of Two Laredos*, Princeton University Press.

————— (2006). *Growing the Game : The Globalization of Major League Baseball*, Yale University Press.

Laidlaw, Robert (2010). Baseball Again on Parade at Norwood Oval, *Australian Baseball League Official Program*, 52-53.

前田恵 (2010)「国際舞台で勝つためにプロリーグ 10 年ぶりに復活へ！」、『ベースボール・マガジン』34 (6), 76-79.

Majumdar, Boria & Brown, Sean (2007). Why Baseball, Why Cricket? Differing Nationalisms, Differing Challenges, *The International Journal of the History of Sport*, 24 (2), 139-156.

マクガイヤー, ジョセフ, 東方美奈子・松村和則訳 (1999). 「スポーツ化とグローバル化：プロセス社会学のパーспекティブ」, 『スポーツ社会学研究』7, 13-22

Nauright, John (2004). Global Games: Culture, Political Economy and Sport in the Globalized World of the 21<sup>st</sup> Century, *Third World Quarterly*, 25, 1325-1336.

岡田千あき (2001). 「アフリカスポーツと開発」, 『月刊アフリカ』, 41 (5), 18-20.

Reaves, Joseph A. (2006). China: Silk Gowns and Gold Gloves, in George Gmelch ed., *Baseball without Borders: The International Pastime*, University of Nebraska Press, 43-64.

トムリンソン, ジョン, 片岡信訳 (1997) 『文化帝国主義』青土社

ホワイティング, ロバート, 鈴木武樹訳 (1980) 『菊とバット：プロ野球にみるニッポンスタイル』サイマル出版会

—————, 玉木正之訳 (1990) 『和をもって日本となす』角川書店

参考ホームページ

ABL ホームページ : <http://web.theabl.com.au/index.jsp>

本稿は第 20 回日本スポーツ産業学会 (2011.7.16) に於ける口頭発表, 「越境するマイナーリーグ—オーストラリアプロ野球リーグの事例から—」をまとめたものである。

謝辞

本稿の執筆は, ABL 当局のフィールド調査の協力なしには不可能であった。特に調査に際して取り計らいをしていただいた ABL 国際部のデニー丸山氏には厚く御礼申し上げたい。

(石原 豊一, 立命館大学大学院国際関係研究科研究生)

## Globalization Watching from Baseball (3): Australia as a Destination of Re-location for North American Baseball

On the 11<sup>th</sup> of November, 2010, the Australian Baseball League (ABL) was inaugurated. Though professional baseball had existed in Australia in the past, it had closed down. Thus baseball in Australia was operated by mainly amateur organizations during the intervening ten years. In the 1990's, when a professional baseball league had previously been operated, North American Major League Baseball (MLB) established its global strategies seeking expansion of market and scouting networks.

In this paper, the global network that developed as a result of global strategy by MLB is regarded as a 'Baseball Regime'. Then this revived professional baseball league is analyzed from that perspective.

Analysis of the background of the revival of the ABL or its function in the 'Baseball Regime' reveals how globalization of sport in recent years has strengthened its character of expansion of market and scouting network with professionalization. This analysis suggests that similar professional baseball leagues will be introduced in other developed countries.

(ISHIHARA, Toyokazu, Doctoral Research Student,  
Graduate School of International Relations, Ritsumeikan University)

